



저작자표시-비영리-변경금지 2.0 대한민국

이용자는 아래의 조건을 따르는 경우에 한하여 자유롭게

- 이 저작물을 복제, 배포, 전송, 전시, 공연 및 방송할 수 있습니다.

다음과 같은 조건을 따라야 합니다:



저작자표시. 귀하는 원저작자를 표시하여야 합니다.



비영리. 귀하는 이 저작물을 영리 목적으로 이용할 수 없습니다.



변경금지. 귀하는 이 저작물을 개작, 변형 또는 가공할 수 없습니다.

- 귀하는, 이 저작물의 재이용이나 배포의 경우, 이 저작물에 적용된 이용허락조건을 명확하게 나타내어야 합니다.
- 저작권자로부터 별도의 허가를 받으면 이러한 조건들은 적용되지 않습니다.

저작권법에 따른 이용자의 권리는 위의 내용에 의하여 영향을 받지 않습니다.

이것은 [이용허락규약\(Legal Code\)](#)을 이해하기 쉽게 요약한 것입니다.

[Disclaimer](#)

金玉任 教授指導

碩士學位 請求論文

ポライトネスの観点から見た無助詞「は」

2023

誠信女子大学校 大学院

日語日文学科

史 世 潁

ポライトネスの観点から見た無助詞「は」

金玉任 教授指導

이 論文을 碩士学位論文으로 提出함

2023年 5月

誠信女子大学校 大学院

日語日文学科

史世潏

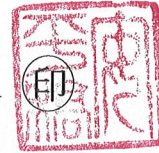
# 認 准 書

史 世 潐의 碩士學位 論文으로 認准함.

審査委員 박 일 호



審査委員 안 평 호



審査委員 김 옥 임



2023年 5月

誠信女子大學校 大學院

## 論文概要

일본어의 구어체 중에는 문어체에는 없는 특징이 몇 가지 있다. 그 중 하나가 명사구 뒤에 조사가 붙지 않는 ‘무조사’이다. 예를 들면 일본어 회화에서는 「(다른 친구들 도시락은 화려하고 예쁜데) 내 도시락은? (私のお弁当は?)」과 같은 문장이 있는가 하면, 「도시락Ø, 어땠어? (お弁当Ø, どうだった。)」와 같이 그러한 조사가 붙지 않는 발화도 자주 볼 수 있다.

이처럼 주어나 목적어가 무조사가 되는 것은 일상 대화에서 흔히 볼 수 있는 현상으로 단순 생략인 경우도 있지만, 무조사가 아니면 설명할 수 없는 경우도 있다. 따라서 본 연구에서는 무조사 「は(wa)」가 어떤 상황이나 조건에서 나타나는지, 또 어떤 역할을 하고 있는지 등에 대해 폴라이트니스(Politeness)의 관점에서 고찰하였다.

선행연구에서는 《의뢰》, 《권유》, 《평가》 등의 표현에는 무조사 「は(wa)」가 나타난다고 지적되고 있지만, 실제 일본어 회화를 보면 긍정적인 평가뿐만 아니라 부정적인 평가나 《비난》, 《거절》, 그리고 《허가》나 《주문》 등을 요청할 때도 무조사 「は」가 사용되는 경우가 있었다.

구체적으로 상대에게 미치는 《비난》이나 《충고》 등의 부담을 조금이라도 완화하기 위해 무조사 「は」가 의도적으로 사용되었다고 판단된다. 그 외에도, 상대에게 《허가》를 요청하거나 상대의 권유를 《거절》하는 장면에서도 무조사 「は(wa)」가 사용되었는데, 이는 「は」에 의한 대비나 강조의 뜻을 피해 《허가》요청의 부담이나 《거절》의 부담을 조금이라도 완화하기 위해,

무조사 「は」가 의도적으로 사용되었다고 판단된다.

그뿐 아니라, 선행연구에서는 무조사 「は (wa)」의 「꺼내기 (取り出し)」기능에는 「신호성」과 「완화 (やわらげ)」의 기능이 있으며, 「やわらげ」는 대비성이나 배타성과 상관없이 중립적으로 기술하는 작용이 있다고 주장하고 있으나, 본 연구에서는 플라이트니스 이론을 원용하여 고찰한 결과, 무조사 「は (wa)」에는 <말화 완화>의 기능이 있다는 것을 알 수 있었다. 즉, 단순히 중립적으로 기술하는 작용이 아니라, 화자(= 말하는 사람)의 주장을 완화해 주는 효력이 무조사 「は (wa)」에 있다고 말할 수 있다. 이 점이 선행연구와의 차이이기도 하다.

이러한 무조사를 사용한 배려는 한국어에서도 볼 수 있는 현상이다. 그리고 많은 연구에서 자주 지적되고 있는 무조사 「が (ga)」나 「を (wo)」 등도 포함하여 남겨진 문제점은 앞으로의 과제로 삼겠다.

# 目次

## 論文概要

1. はじめに	1
2. 先行研究と問題点	3
2.1 松下(1928、1930)	3
2.2 三上(1960)	4
2.3 久野(1973、1978)、Tsutsui(1983)、筒井(1984)...	5
2.4 尾上(1987)、大谷(1995)	7
2.5 甲斐(1992、2000)	11
2.6 長谷川(1993)	16
2.7 問題点	19
3. ポライトネスと配慮表現	21
4. 主題に助詞「は」が付く場合	28
5. 主題に助詞「は」が付かない場合(=無助詞文)	32
5.1 《断り》	37
5.2 《非難》	41
5.3 《許可》	50

5.4 《注文》	52
5.5 《意見不一致》	53
6. おわりに	55

参考文献

用例出典

ABSTRACT

# ポライトネスの観点から見た無助詞「は」

## 1. はじめに

日本語の話しことばの中には、書きことばにはない特徴がいくつか見られる。黒崎(2003: p.77)ではその中の一つが、係助詞の「は」や格助詞の「が・を」が現れない現象であるとしている。本研究では「名詞句の後ろに助詞が付かない場合」を無助詞<sup>1)</sup>と呼ぶ。(以下、「∅」は無助詞)。

(1) A: 由香里のおにぎり∅、おしゃれたね。

B: 本当だ。すごいカラフル。

(2) A: それにひきかえ、私のお弁当は？。

(アニメ 「新あたしんち」)

(3) ナスオの母: お弁当∅、どうだった？

ナスオ: どういうつもりなの、これ。

(アニメ 「新あたしんち」)

---

1) 研究者によって名称はさまざまである(はだか格、ゼロ助詞、無助詞格など)が、名詞句に助詞がついていないものを扱うので本研究では無助詞と呼ぶことにする。

例えば、日本語の会話では例(2)の「私のお弁当は？」のような文もあれば、例(1)の「由香里のおにぎり、おしゃれだね」や例(3)「お弁当、どうだった」のように、そうした助詞がつかない発話も頻繁に見られる。主語や目的語が無助詞になることは日常会話の中で良く見られる現象であって、単なる省略の場合がほとんどであるが、無助詞でなければ言い表せない場合もあるように思われる。そこで本研究では、無助詞「は」を対象として、無助詞「は」はどのような条件で現われるのか、また、どのような役割をしているのか、などについて特にポライトネスの観点から考察したいと思う。

## 2. 先行研究と問題点

無助詞に関する先行研究は数多く出ている。黒崎(2003：p.77)も含め、これまでの研究は、「助詞がない」ことに対し、単なる助詞の省略とするものと、もともと助詞は存在せず、他の助詞に相当する機能がそこにはあると捉えるものと、意見が分かれているが、無助詞について助詞の省略とみなされるものと独自の機能をもっているとみなされるものとは連続性があり一概に区別できないことは先行研究でも指摘されている(丸山 1996 など)

### 2.1 松下(1928、1930)

松下(1928、1930)は、まず「題目」と「平説」を分けた上で、「が・を」のない平説の存在を認めている。さらに題目を分説、合説、単説に分けており、そして、分説は「は」を付け、合説は「も」を付け、単説には何も付けずとしており、無助詞の存在を指摘している。「あの人、幹事です」のように、「分ける意味も合わせる意味もない題目は単説である」と説明している。「∅」を「は・も」と共に「題目態」とし、その主題性を指摘している。松下の例文を整理すると次のようになる。(「∅」は筆者による。)

題目	分説	あの人 <u>は</u> 幹事です	御飯 <u>は</u> 食べますか
	合説	あの人 <u>も</u> 幹事です	御飯 <u>も</u> 食べますか
	単説	あの人 <u>∅</u> 幹事です	御飯 <u>∅</u> 食べますか
平説		あの人 <u>が</u> 幹事です	御飯 <u>を</u> 食べますか

## 2.2 三上(1960)

三上(1960)は「はだしの名詞、つまり助詞を伴わない「X一」が題目の役目をする」ことがある、と述べているが、「X一」の形がすべて題目とは限らず、どのような場合に題目と認めるかは吟味が必要である、としている。

なお、提題の中心は「Xは」であるが、例(6)、例(7)のように助詞を伴わない「はだしの名詞(=X一)」もちょうど実物に目くばせしたり、指で指したりすることに相当する効果があるとしている。(X一=∅)。

- (4) 象の鼻は長い。
- (5) アジは三枚におろし、腹や背の小骨も全部取ります。
- (6) そんな人一知らないわ。

(7) この小説一大阪商人の生態を描いて、西鶴に迫ると言われている。

### 2.3 久野(1973、1978)、Tsutsui(1983)、筒井(1984)

「助詞がない」ことを助詞の省略と捉えるものには、久野(1973)、筒井(1984)などがある。久野(1973)は主文の主語をマークする「が」は会話文でも省略できず、主文に助詞を伴わないで現われる主語は全て「は」の省略であるとしている。そして、その理由を、久野(1978)では、聞き手が推測可能なものは省略しやすい(例(8))。文脈の流れにおいて、古い情報、話し手と聞き手との間で既知の情報と判断されるものは省略するのが自然であると説明している。

(8) 太郎君 $\emptyset$ 大阪に行っちゃった。

(9) 僕( は / が /  $\emptyset$  ), この会社の副社長です。

上例(9)の「は」は、話し手がどういう地位にあるかを伝えているだけで他の人については何も言っていない(=主題)が、対照の場合なら、この会社には、まだ他に副社長がいるかもしれない。他方、「が」は、今話題になっている人達の中で話し手だけが副社長であることを意味する(=総記)。

一方、Tsutsui(1983)では、「は」だけでなく「が」も省略できる。その後、筒井

(1984)では「は」の省略の条件を次のように述べている。

1) 「Xは」が焦点の時

(10) ぼくは去年は(\*Ø)泳がなかった。

焦点とは一般に話者が意図する情報伝達を行う際にもっとも聞き手に伝えたい情報を指す。

2) 「Xは」の対応部分が省略された時

(11) 太郎は(\*Ø)?

もし対応部分が明示されていれば省略は可能である。

(12) 太郎Øどうした?

3) 「Xは」の対応部分が強調された時、「Xは」の対応部分の強調には次の2種類がある

a) 単純にあることを強調する場合

(13) それは(\*Ø)うそだ!

b) 「Xは」の対応部分が何かと対照されている場合

(14) a. : 失礼ですが、鈴木さんですか。

b. : いいえ、私は(\*Ø)山田です。

対応部分が強調されないような文脈、状況の「は」の省略は不自然にならない。上のいずれも満たさない場合は、「は」の省略は自然となる。

## 2.4 尾上(1987)、大谷(1995)

尾上(1987)は「主語に「は」も「が」も使えない文」の存在を指摘し、三つのタイプに類型化している。しかし、尾上(1987)は類型化に留まっており、なぜ「は」も「が」も使えないのかについては、ほとんど述べていない。

<p style="text-align: center;"><b>A</b> タイプ</p>	<p>存在の質問文およびそれに類似のもの</p> <p>(15) はさみある？</p> <p>(16) お湯熱い？</p>
<p style="text-align: center;"><b>B</b> タイプ</p>	<p>談話の中で初出の主語に対し、述語で積極的に新しく説明あるいは評価を与える</p> <p>(17) この店安いんだ。</p> <p>(18) (見ろ!) あの猿、木から落ちたよ。</p>
<p style="text-align: center;"><b>C</b> タイプ</p>	<p>主語と後続内容との関係は、「が」で示されるような積極的な論理関係ではなく、「は」で表現されるような積極的な「題目-解説」関係でもない</p> <p>(19) ぼく、さびしいな。</p> <p>(20) あんた、先に行って。</p>

尾上は「は」の基本的な文法特性を次のように、2つ設定している。

「は」はその係り受ける範囲全体を意欲的に対象として働く
-----------------------------

「は」の意味的な個性は分説性である
-------------------

さらに、この文法特性により、対比と題目提示という2つの談話効果が得られるとしている。

対比 <sup>2)</sup>
------------------

題目提示
------

大谷(1995)も尾上と同じく「は」も「が」も使えない文について分析している。助詞の省略を認めながら、そのうち、いずれの助詞も使うことができない文について情報の新・旧及び対話における知識管理という観点を用いて述べている。たとえば次のように、情報を現象文と判断文と関連づけて分析している。

### < 現象文からの逸脱 >

仁田(1991)によると現象描写文とは「ある時空の元に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝えたもので文全体が新情報の文」である。例えば、

---

2) 対比的な意味というのは、ほかのものと比べて、「ほかのものはそうではないが、これはこうだ」というような意味である(野田 1997)。

(21) (ふと窓を見て)

あれっ! 山田さん ( Ø / が / \*は ) あんなところにいるよ。

(22) あっ、雨 ( Ø / が / \*は ) 降ってる!

この場合「が」の有無による意味の違いはない。しかし、「発見」の場で「現象をそのまま表現」した発話文において、が格の名詞が先行文脈に登場し、話し手、聞き手にとって旧情報である場合には、次のように「は」も「が」も使えないとしている。(下線は筆者)。

(23) (ずっと、山田さんを捜している。)

甲: ねえ、そっちにはいない?

乙: うん…あれっ!

山田さん ( Ø / ?が / ?は ) あんなところにいるよ。

(24) (部屋の中に数人がいる)

甲: (窓のほうを見て)

雲行きがあやしくなってきたなあ。

乙: 雨、降ってる?

甲: どうかなあ。降ってないんじゃないか。

丙: えっ、降ってるんじゃないの。

乙: ちょっと見てみるよ。

(窓を開けて言う)

あつ、雨 ( Ø / ?が / ?は ) やっぱり降ってる!

つまり、事態の捉え方は、現象を認知し判断の加工を加えずにそのまま発話しており現象文的だが、情報の流れは、その主語の名詞が文脈上主題になっていて判断文的である。この矛盾により「は」も「が」も使えない文となるとしている。

#### < 判断文からの逸脱 >

眼前の事態を描写しているように思われる例(25a)では「が」を使うことができるが、例(25b)は「は」も「が」も使えないとしている。

(25) a. あつ、時計 ( Ø / が / \*は ) 止まってる。

b. あつ、この時計 ( Ø / \*が / \*は ) 止まってる。

## 2.5 甲斐(1992、2000)

甲斐(1992)は「は」の省略について次のように述べている。

1. 「は」によってマークされている名詞句をXとすると、その他の条件が同じならXが1・2人称の方が3人称に比べて「は」を省略しやすい。

2. 文の表現形式に関わる条件の中である「確定」と「聞き手への配慮」の2つの原則に支配されている。

(pp. 113-114)

そして「確定」の原則とは、例(26a)のように、「話者が当該事態を真だと確信し、それを強く主張する場合「は」は省略しにくい」というものであり、それは真偽判断のモダリティに関係すると述べている。

(26) a. ご両親は (\*Ø) きみの将来を気づかっている。

b. ご両親は (Ø) きみの将来を気づかっているみたいだ。

真偽判断のモダリティと省略との関連は以下の図1のようになる。

< 図1：確定—非確定と真偽判断のモダリティと相関 >

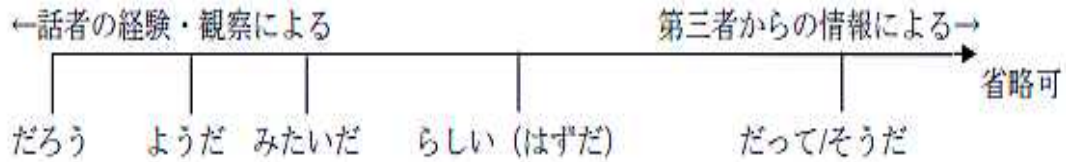


図1のように、右へ行くほど、判断の根拠が第三者からの情報によるものになり、話者自身の経験や観察ではなくなっていくため、確信の度合いも低くなるからだとしている。

次に「聞き手への配慮」の原則とは「聞き手への配慮がある程「は」は省略しやすくなる」というもので、これは「聞き手の持つ情報に対する配慮」と「話し手と聞き手の持つ情報に対する配慮—対人的配慮」の2つに大きく分けられ、前者は更に「認識の差に対する配慮：よ、じゃないか」「同一認識に対する配慮：ね」「聞き手の持つ情報との食い違いに対する配慮：～なんかじゃない」「のだ」の4つに分けられる、としている。つまり、このような配慮が明示化された場合「は」は省略しやすくなるとし、これら4つに順番はなく、ただ羅列してあるだけであるとしている。

- (27) a. 松阪牛は (\*Ø) おいしい。
- b. 松阪牛は (Ø) おいしいよ。

また、なぜ聞き手への配慮があるほど「は」を省略しやすくなるのか、という問いの答えとして、話者の一方的な主張を弱める効果があるからだ、と述べているが、しかし、終助詞や文末表現による効果かもしれないし、検討する必要があるように思われる。

さらに、甲斐(1992)は、次の例(28)、例(29)のように、丁寧さによって「無助詞」の出現の違いがあるとしている。

#### < 非丁寧さの例 >

- (28) a. \*ねえ、はさみはある？  
b. \*ねえ、はさみがある？  
c. ねえ、はさみ $\emptyset$ ある？

#### < 丁寧さの例 >

- (29) a. すみませんけれども、はさみはありませんでしょうか？  
b. \*すみませんけれども、はさみがありませんでしょうか？  
c. すみませんけれども、はさみ $\emptyset$ ありませんでしょうか？

以上のように、丁寧な言い方にすると「は」のあるほうがむしろ自然な場合もあるので、「は」を用いる場合注意する必要があるとしている。ただし、(29a)の「すみませんけれども、はさみはありませんでしょうか？」と(29c)の「すみませんけれども、はさみ $\emptyset$ ありませんでしょうか？」の差異は何なのかについては、言及しておらず、検討する必要があると思われる。

続けて、甲斐(1992)は「無助詞」は話者の情報と聞き手の情報が関連性を有しており、話者の持ち出した談話のトピックが聞き手の情報の中に記録されているか、または記録されやすい場合に用いられると指摘している。つまり、話者と聞き手の間で談話主題の共有度が実際に高いか、あるいは潜在的に高い場合に「無助詞」が使われるということである。

その後、甲斐(2000)は省略現象を認知言語学的な観点から、話し手と聞き手には情報ベースが存在し、情報ベースにインプットされるか否かによって省略有無が決まるとしている。また、話し手の視点と聞き手の視点を考慮しており、省略される要素は文の成立に必要なものでありながら聞き手が解釈できるものであるとする。

具体的には、「何らかの原因で言語化されないもの」というように省略される対象を記述しており、そこには話し手のみならず聞き手も含む両者の認知過程が背景として働いているとしている。この場合、省略されている要素がどの範囲まで省かれているのかに注目する必要があると指摘している。なお、無助詞は話し言葉にみられる言語形態であり、談話を円滑に運ぶ機能を持ち、会話上の話題を提示する際に表示する機能があり、話し手が聞き手に新しい主題を提示する際に使用するとしている。

しかしながら、どうして無助詞「は」が談話を円滑に運ぶ機能を持つのかについては、ほとんど述べておらず、検討する必要があるように思われる。

## 2.6 長谷川(1993)

長谷川(1993：pp.158-168)は無助詞を「単なる省略(例30、31)」と独自の機能を持つ「取りだし」に分け、さらに「取り出し」を注意を喚起する「信号性」と「やわらげ」という機能に分けている。

(30) わたくし $\emptyset$ 長谷川と申しますが、松岡さん $\emptyset$ いらっしゃいますか。

(31) ちょっと急いだ話(  $\emptyset$  / が ) あるんですけど。

そして「信号性」は「話し手が聞き手に何らかの合図を送ると言う意味を持つのに似ている」とし、「やわらげ」は「「は」の持つ「対比性」や「が・を」などの持つ「排他性」の意味を避けて中立的に叙述することである」と言っている。(32)～(34)が、その例である。本研究では基本的には長谷川(1993)の立場を従うことにする。

### < 信号性の例 >

(32) (買ったばかりのパンを見て)

あれ? このパン $\emptyset$ 、かびがはえてるよ!

(33) (電話で)

こちら $\emptyset$ 、事務局でございますが。

< やわらげの例 >

(34) (電話をかけようと思い、10円玉を借りようとして)

こまかいの( Ø / ?が / ?は ), ある?

以上の先行研究で指摘した無助詞の特徴をまとめると、下のようになる。

- ① 話し言葉にしか現れない。
- ② 対照の「は」と総記の「が」は省略すると不自然になる。  
(筒井 1984)
- ③ 全く新しい主題を「は」によって明示化すると唐突な印象を与える。
- ④ 取り出し機能 / 「XØY」の「Y」の部分に話し手の意図がある。  
(長谷川 1993)
- ⑤ やわらげ機能 / こまかいのØ、ある? (長谷川 1993)
- ⑥ 信号性の機能(=合図を送る機能) / こちらØ、事務局でございますが。  
(長谷川 1993)

表1 < 無助詞の機能(先行研究) >

	無助詞の機能
三上(1960)	信号性
久野(1973) 筒井(1984)	既知性
甲斐(1992)	非丁寧
長谷川(1993)	信号性・やわらげ
甲斐(2000)	円滑化

## 2.7 問題点

以上の先行研究からの問題点をまとめると、次のようになる。

1) 尾上(1987)は「主語にハもガも使えない文」の存在を指摘し、三つのタイプに類型化している。しかし、尾上(1987)は類型化に留まっており、なぜ「は」を使えないのかについては、ほとんど述べていない。

2) 甲斐(1992)によると丁寧さによって、無助詞の出現の違いがある。しかし、「わたくし~~の~~長谷川と申しますが、松岡さん~~の~~いらっしゃいますか」のように、全く親しみの無い関係でも無助詞が用いられることもある。従って、親しみとの関連性について検討する余地がある。

3) また、甲斐(1992)では、なぜ聞き手への配慮があるほど「は」を省略しやすくなるのかという問いの答えとして、話者の一方的な主張を弱める効果があるからだとしている。しかし、話者の主張を弱める効果は終助詞「よ」によるものなのか、「は」の省略によるものかを検討する必要がある。

4) さらに、甲斐(2000)では、丁寧な言い方にすると「は」のあるほうがむしろ自然な場合もあるとしている。ただし、(29a)の「すみませんけれども、はさみはありませんでしょうか?」と(29c)の「すみませんけれども、はさみ~~の~~ありませんでしょうか?」の差異は何なのかについては、言及しておらず、検討する必要があると思われる。

5) 長谷川(1993)では、《依頼》、《権誘》、《申し出》などの意図を表す表現にはよく「∅」が現れると述べているが、実例を見ると、《断り》とか《非難》などにも無助詞が用いられる場合があり、検討する必要がある。

6) また、長谷川(1993)では、無助詞の「取り出し」の機能には「信号性」と「やわらげ」の機能があり、「やわらげ」は対比性や排他性を不問にして中立的取り出す働きがあると述べているが、無助詞の使用により《断り》とか《非難》の語調を緩和する効果が生じると予測されるので、ポライトネスの観点から検討する必要があると考える。

### 3. ポライトネスと配慮表現

配慮表現とポライトネスとの関連性についての研究としては、B&L(1987)、宇佐美(2006)、山岡他(2010)、山岡他(2018)などが挙げられる。

B&L(1987：p.60)のポライトネス理論では、「ポライトネス」は以下のような基本概念に基づく操作的定義によって規定されている。「フェイス」という鍵概念—人間には、以下の二種類の基本的欲求がある。

ポジティブ・フェイス	ネガティブ・フェイス
他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたいという欲求。 (プラス方向への欲求)	賞賛されないまでも、少なくとも、他者に邪魔されたり、立ち入られたくないという欲求。 (マイナス方向へに関わる欲求)

「ポライトネス」は、対話者のこの二種類のフェイスを保つための戦略として規定されるとした。また、これらの鍵概念を基に、以下のような「フェイス侵害度見積りの公式」を立てている。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

**W<sub>x</sub>** : 行為xの「フェイス侵害(FT)の度合い」(以下、FT度)

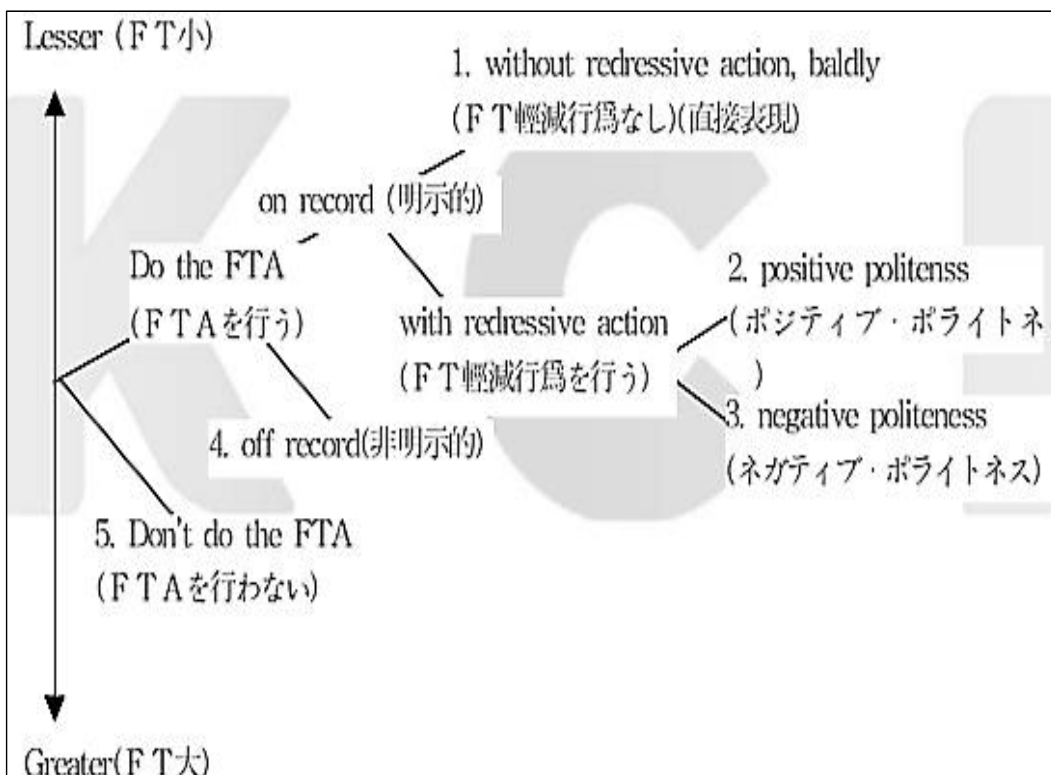
**D** : 話し手(Speaker)と聞き手(Hearer)の「社会的距離(Social Distance)」

**P** : 聞き手(Hearer)の話し手(Speaker)に対する「力(Power)」

**R<sub>x</sub>** : 特定の文化で、ある行為xが「相手にかかる負荷度(Rank of imposition)」

さらに、B&Lは、ポライトネス・ストラテジーの選択を決定する状況を、以下の図2のように表している。

<図2：ストラテジーの選択を決定する状況>



一方、B&Lの人間の基本的欲求としての「フェイス」の概念、「フェイス侵害度見積もりの公式」などの基本的で有効な部分は組み入れながらも、新たな視点を加えて発展させつつあるのが、宇佐美(2006)の「デイスコース・ポライトネス理論」である。

宇佐美(2006)では、円滑なコミュニケーションのための戦略としてのポライトネスを談話レベルで捉え、敬語行動なども含めた談話行動の「対人効果」を「相対的に」捉えて分析するための枠組みとして、また、対人コミュニケーション理論として構想・展開されている「デイスコース・ポライトネス理論(以下、DP理論)」の基本的概念を紹介するとともに、日韓の準自然場面における「誘い会話」データを取り上げ、DP理論の観点から定量的に分析している。

次は、配慮表現とポライトネスの関連性について概観しておきたい。

#### (35) [配慮表現の定義]

対人的コミュニケーションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられることが、一定程以上に慣習化された言語表現（山岡他2018：p.159）

山岡他(2018)によると、人と人とのコミュニケーションにおいては、相手のフェイスを脅かす場合が数多く存在する。

依頼行為を例にすると、依頼者側は、相手がそれに応じる場合は時間や手間といった負担を強いることになり、相手の消極的フェイスを脅かす。また、依頼を受ける側も、依頼

を断り相手に迷惑をかけることを避けようとし、依頼に応じなければならないという心理的負担を負い、これは相手の積極的フェイスを脅かす。依頼を断る場合は、その行為が、話者の積極的フェイスを脅かし、相手の消極的フェイスを脅かすことになる。このような相手のフェイスを脅かす可能性のある行為を総称して、フェイス脅かし行為(Face-Threatening Act : 以下、FTA)と呼んでいる。人はFTAを回避するための言語行動、つまり、相手のフェイスをなるべく脅かさないように配慮した言語行動を行うが、それをB&Lはポライトネスと呼んでいる。

そして、牧原(2012)によると、FTAが相手のフェイスを脅かす度合いに応じて、様々な種類のポライトネスの中から、その都度、適切なポライトネスを選択する。つまり、ポライトネスは様々な言語行動が含まれるため、どのような時にどのような言語行動を選択するかは多種多様である。その選択基準の体系が、ポライトネス・ストラテジー(Politeness Strategy)である。具体的には街中で、時計を忘れてしまい時間が分からないという場合、街中のどこかで時計を見つけるまで歩き続けるというのも一つのストラテジーであるし、見知らぬ人に声をかけて時間を確認するというのもストラテジーである。このように、ポライトネスは言語行動の選択を巡る方略についての理論であるが、ある言語行動を行うことを選択した場合、その表現の方法は様々である。

例えば、見知らぬ人に時間を聞くという行為を選択した場合には、「今、何時ですか」「すみません、今何時かお分かりになりますか?」「恐れ入りますが、時計、お持ちですか?」のような様々な表現から最も適切と思われるものを選択して発話することになる。このような、固定された言語行動に対応する表現の選択を巡る理論を、山岡他(2010)では「配慮表現の原理」としている。

「配慮表現の原理」は、ポライトネスの原理とは対照的な原理として存在する。気配りの

原則と寛大性の原則を例にすると以下のようになる。

	① ポライトネスの原理 <sup>3)</sup>	② 配慮表現の原理
(A) 気配りの原則	(a) 他者の負担を最小限にせよ	(a) 他者の負担が大きいと述べよ
	(b) 他者の利益を最大限にせよ	(b) 他者の利益が小さいと述べよ
(B) 寛大性の原則	(a) 自己の利益を最小限にせよ	(a) 自己の利益が大きいと述べよ
	(b) 自己の負担を最大限にせよ	(b) 自己の負担が小さいと述べよ

具体的には、牧原(2012)では、誰かに押印を頼むという場面での発話として、以下のよ  
うな例文を挙げながら説明している。

3) Leech(1983)は対人関係に対するより高度な配慮をもってなされる言語行動の原理について、ポライトネスの原理(the politeness principle)として論じた。具体的には自己と他者に及ぶ利益・負担などに配慮して行われる言語行動の原理として6項目のポライトネスの原理を立てている。

(36) ここに印鑑を押してください。

(37) ご面倒をおかけしますが、ここに押印してください。

(38) こちらに印鑑を押していただきたいのですが。

(39) こちらに押印していただくと、大変有り難いのですが。

(36)はポライトネスの原理(A①-a)「他者の負担を最小限にせよ」の原則に反する《依頼》である。しかし、同じ《依頼》でも、(37)においては、「ご面倒をおかけしますが」の部分で相手の負担を強調している。これは配慮表現の原理(A②-a)「他者の負担が大きいと述べよ」の原則に沿うものである。(38)の「いただきたいのですが」は自己の願望を表明することで、話者が受ける利益が大きいことを述べている。

(39)のまた、「大変ありがたい」の部分では自己の利益を強調している。これは配慮表現の原理(B②-a)「自己の利益が大きいと述べよ」の原則に沿うものである。これに対して行為者が「お安いご用だよ」と応じたとすると、これは配慮表現の原理(B②-b)「自己の負担が小さいと述べよ」の原則に沿うものである。

その後、山岡他(2018)には、日本語の配慮表現の事例として、「ちょっと」とか「かもしれない」などが挙げられている。具体的には、慣習化の結果、原義が喪失される事例として、副詞「ちょっと」が挙げられている。「ちょっと」の本来の語義は低程度の程度副詞である(例40)。

(40) 今日はちょっと寒い。

(41) 君の書類、ちょっと雑だな。

(42) A：一億五千万円ほど融資していただきたいのです。

B：その金額はちょっと無理かと思いますが。

しかし、(41)のように、相手の消極的フェイスを脅かす《非難》の発話状況で、相手との摩擦を緩和する配慮を動機づけとして、程度を抑制するために用いられる「ちょっと」にはポライトネスの機能が発生すると説明している。つまり、本来の低程度の意味を有したまま緩和というポライトネス機能に拡張するわけである。こうした用例の緩和機能だけが残って慣習化し、ある種の定型表現となった用法が(43)の例であり、「ちょっと」の原義であった低程度の意味は完全に喪失していると指摘している。(以上の関係性を図式化して示すと次のようになる)。

	原義	ポライトネス	分類
ちょっと寒い	低程度		非配慮
ちょっと雑だな	低程度	緩和	配慮拡張
ちょっと無理	(喪失)	緩和	配慮特化

以上のことから、《依頼》では「ご面倒をおかけしますが」のような前置き表現や、「していただきたいのですが」のような言い切らない表現、「ていただく」のような間接的な表現などが、また《非難》とか《断り》などには副詞「ちょっと」などが、慣習的に多く用いられるということと、こうした配慮表現を用いることによって、相手への負担を緩和しようとしているということが分かる。無助詞「は」も、《非難》とか《断り》などに用いられており、何らかの形でポライトネスと関わりがあるのではないかとと思われる。

## 4. 主題に助詞「は」が付く場合

ここでは、「は」の特徴的な意味用法について簡単に見てみたい。

日本語学習者が最も混同しやすい部分が主語と主題である。主題はその文が何について述べるかを示すもので、日本語では典型的には「は」で表われる。

しかしながら「は」と「が」は、どちらも文の主語を表す助詞として意識されることが多く、そのため、「私は山田です」のような「は」と「私が山田です」のような「が」の違いがよく問題になる。「は」と「が」の使い分けを説明するために従来の研究で取り上げられた主な観点をまとめると、大きく次の4つに分類できる(野田 1995)。

- (ア) 情報性：新情報には「が」、旧情報には「は」
- (イ) 文の種類：現象文には「が」、判断文には「は」
- (ウ) 係りかた：文末に係る時は「は」、文末まで係らない時は「が」
- (エ) とりたてかた：対比的なときは「は」、排他的なときは「が」

これらのうち、(ア)の情報性というのは、たとえば、

(43) 私は吉田と申します。社長に御取次を願います。

(44) 私が先日履歴書を差上げました吉田でございます。

(43)は、何も知らない受付の人に言う文で、目の前にいる「私」は既定の概念で、「吉田」は未定の概念である。このような既定の概念の「私」には「は」がつくと説明される。それにたいして、(44)は、「吉田」という名前を知っている社長に言う文で、「吉田」が既定の概念で、「私」は未定の概念である。このような未定の概念には「が」がつくと説明される。

次に、(イ)文の種類については、以下のように説明している。

(45) 雨が降ってる。

(46) それは梅だ。

(45)は、現象のありのまま、判断の加工をほどこさないで、心にうつったままを、そのまま表現した現象文であり、ガが使われると説明される。それにたいして、(46)は課題である「それ」にたいして、話し手の主観が判断をくだして、「梅」が解決として真であると主張する判断文であり、ハが使われると説明される。

(ウ)の係りかたというのは、たとえば、

(47) 鳥が飛ぶ時には空気が動く。

(48) 鳥は飛ぶ時に羽根をこんな風にする。

(47)の「が」の勢力は「飛ぶ」までしか及ばないのに対して、(48)の「は」は「飛ぶ」には直接関係しないで、「羽根をこんな風にする」という部分と結びつくと説明され

る。

(エ)のとりたてかたについては、次のように説明している。

(49) 雨は降っていますが、雪は降っていません。

(50) 太郎が学生です。

(49)は、「雨が降っています」と「雪が降っていません」の対照を表しているため、「は」が使われると説明される。一方、(50)は、「(今課題になっている人物の中では)太郎だけが学生です」という総記の意味を表しているため、「が」が使われると説明される。

中島(1995)でも、「は」は取り立て助詞で、「強調、限定、対比など」などの意味を加える助詞である。具体的には、「は」の「主題提示」も「強調対比」によって発生するもので、対比強調と見ても差し支えない場合が多い。対比文脈の中のある対象を指定し、それに関連するものを対比として表すことをいうと述べている。大きな枠組みで主題提示は「～は/は～(が)だ」の説明の形式で表現され、話者が言おうとする核心内容は「は」の後に存在すると説明している。

続けて、「は」が文章で主題を表すのか対照の性格を帯びるのかは明確に区分できないとしている。意味的には全く違うとは言えないが、一般的に一つの文章に2つ以上の「は」がある場合、一番前に書かれた「は」が主題を表し、それ以外のは対照的な意味を持つとしている。

一方、野田(2002)によると、主題を表すときは「は」を使い、「が」格を表す時は「が」を使う。つまり、主題と「が」格はまったく違うレベルのものなので、主題か「が」格かを選択することはできない。選択できるのは、「主題であるか主題でないか」ということや、「「が」格であるか「を」格であるか」ということで、これをまとめると、次の表になる。(表の上下の対立は、主題であるかないかの対立で、表の左右の対立は、「が」格か「を」格かといった格の対立である)

(51)

	ガ格	ヲ格
主題である	田中は来た	肉は食べた
主題でない	田中が来た	肉を食べた

続けて、野田(1995)によると、ここで問題になるハとガの使い分けというのは、ガ格として使われる名詞が主題になるかならないかということである。つまり、(51)の表の「田中は来た」と「田中が来た」の使い分けである。ガ格が主題になればハになり、主題にならなければガになるとされる。

以上のことから、「は」は取り立て助詞で、「対比」などの意味を加える助詞であるということと、主題が現れる文章であるか否かによって「が」格が「は」に変化するのであって、一つの公式のように主題には「は」、主語には「が」を使うのではない、ということなどが分かる。

## 5. 主題に助詞「は」が付かない場合(=無助詞文)

尾上(1987)では、主語に「は」も「が」も使えない文が用いられるのは「は」を使った場合の表現効果(対比、題目提示)も「が」を使った場合の表現効果(文の種類、述語の種類、述語のテンス・アスペクトなどにより様々)も出ては困る場合である、ということを確認した上で「は」も「が」も使えない文を3分類している。

まず、Aタイプは、「存在の質問文およびそれに類似のもの」で、「存在文の主語は「ある」という述語付けに先立って措定されるものではなく、述語の側で「ある」と存在が承認されるのと同時に主語として措定される」という特殊性によって「は」が使えないと説明される。

(52) はさみある? (= (15))

Bタイプは、「Discourseの中で初出の主語に対し、述語で積極的に新しく活動説明あるいは評価を与える」もので、「題目一解説関係」を帯びた文の主語に「ガ」を用いることができないという理由が示されている。

(53) このチョコレートおいしいね。

Cタイプは、主語が明示されなくても、内容として話し手自身のことや発話相手に対する語りかけに決まっているものである。「『主語』と後続内容との関係は、「が」で示されるような積極的な論理関係ではなく、「は」で表現されるような積極的な『題目解説』関係でもない」と説明されている。

(54) ぼく、さびしいな。(= (19))

しかし、実際の日本語の会話を見ると、Bタイプの、(53)「このチョコレートおいしいね」のようなプラス的な評価だけでなく、次のようなマイナス的な評価や《非難》などを表す時も、無助詞が用いられることもある。

(55) (居酒屋でお酒を飲みながら)

弱木：最近のチャラ田さんはただのチャラ男です。

チャラ田：はあ？てめえに言われたくない。

(一緒に飲んでた女性たちに) ごめん、ごめん。

弱木：天井さん、ごめん。今日は帰るね。

チャラ田：なんだよ！弱木のくせにムカつくな！

おい、天井、付き合えよ。

天井：なんか、今日のチャラ田先輩、ダサイです。

(天井も帰ってしまう)

(ドラマ 「高嶺のハナさん2」)

(56) チャラ田：あ～なんかやるき出ねえ～な。

高嶺は乗り換えた男のために頑張ってるだけだろう。

天井：弱木先輩にも言い過ぎですよ。

弱木：高嶺さんにはふられちゃったけど、尊敬する高嶺さんのために頑張りたいんだ。

チャラ田：お前、本当バカだ！

(ドラマ 「高嶺のハナさん2」)

(55)、(56)は先輩と後輩との会話であり、両方とも、聞き手への《非難》を表明している場面であるが、聞き手への気遣いとして無助詞が用いられているように思われる。

次に、長谷川(1993)では、《依頼》、《勧誘》、《申し出》などの意図を表す表現にはよく無助詞が現れるということが指摘されている。

(57) (電話をかけようと思い10円玉を借りようとして)

こまかい ( が ? / は ? )、ある？

(長谷川 1993)

(58) (コーヒーを勧める時)

コーヒー ( を ? / は ? )、飲みます？

(長谷川 1993)

(59) 「具合が悪そう。ふとん ( を ? / は ? ) 敷く？」

「自分でできる。悪いけど、寝るわ。」

(長谷川 1993)

たとえば、(57)の文では、「が」が用いられると、単純に小銭があるかないかをたずねている表現になってしまい、「は」が用いられると、札ではない小銭とわざわざ言っているような感じになり、「小銭があったら、貸してほしい」という《依頼》の意図がうまく伝わりにくいと説明している。

例(58)でも、「を」を入れるとコーヒーを飲むのか飲まないのかという選択を迫っているかコーヒーを飲む習慣があるかどうかを確かめているような表現になってしまい、「は」だと、他のものと比べているかのような感じとなり、どちらも何かを勧める表現としてはなじまないと述べている。

また、例(59)の文でも、「を」が入ると布団を敷くことを《申し出る》という意図が薄れてしまい、「は」だと他のものと比べている感じが出てしまうとしている。

結局、「が」を用いることによって「こまかいのがあるコト」のように一まとまりにしてしまうと、他の可能性を排除してしまい、《依頼》、《勧誘》、《申し出》などのような相手の意向を重視するような表現にはそぐわないとしている。また、「は」を用いると、この場では不必要な対比性を帯びてしまうが、「 $\emptyset$ 」は他の可能性を積極的に排除することも積極的に暗示することもなく、いわば中立的に提示することができるため、相手の意向を尊重するような表現に用いられても違和感がない。「 $X\emptyset$ 」で「X」を中立的に取り出すことによって、相手への働きかけを効果的に行うということが「 $\emptyset$ 」の《やわらげ》の機能であるとしている。

一方、本研究でのポライトネスの観点から見ると、長谷川(1993)で指摘した、《依頼》、《権誘》、《申し出》は、聞き手に何かを要請するという点で共通しているように思われる。先述したように、山岡他(2018)によると、配慮表現とは対人的コミュニケー

ションにおいて、相手との対人関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現であり、《依頼》はFTAの最も典型的な例である。よって、次のような《依頼》などにみられる無助詞も一種の配慮表現として用いられているのではないかと思われる。

(60) いわい：俺、やっぱり結婚したいんだけど、ダメかな？

てつこ：いいよ。

いわい：え？本当に？

(ドラマ 「昨夜のカレー、明日のパン」)

(61) あの、秘密にしてもらえませんか。困るんです、わたし。

(ドラマ 「極上」)

(62) 店長：いらっしゃい。

はい、お待ち。

2名様、こちらのカウンターでお願いします。

男1：俺、鮭の塩焼にするわ。

男2：いいね。鮭、2つください。

男1：俺さ、鮭の皮超好きなんだよね。

男2：うまかねーよ。

(アニメ 「ワカコ酒」)

また、実例を観察してみると、《依頼》、《権誘》、《申し出》以外に、《断り》とか《非難》、《忠告》、《注文》などを表す時も無助詞「Ø」が用いられたりすることが分かる。まず、《断り》から見ることにする。

## 5.1 《断り》

無助詞は《依頼》や《権誘》だけでなく、以下のような《断り》の場合も無助詞が用いられることがある。

(63) ゆう：あすなちゃん、一緒に帰らない？

あすな：あ、ごめん。私Ø、ちょっと急がなきゃいけないの。

誘ってくれてどうもありがとう。

ゆう：うん。じゃ、また今度ね。

(アニメ 「星を追う子ども」)

例(63)の文は友達同士での会話である。「一緒に帰らない？」という友達の《権誘》に対して、「ちょっと急がなきゃいけないの」という《断り》の意図を伝えている場面である。「は」が用いられると、対比や強調の意味になってしまうので、《断り》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたのではないかと思われる。

(64) 富田：ねえ、はると、良かったら夏休みうちの別荘に来ない？

はると：あ、俺Ø、生物部の活動で忙しいわ。

(ドラマ 「1リットルの涙」)

(65) (部活のクリスマスパーティーについて)

梶井：いつやる？24日？

新田：私Ø、24日はちょっと…。

みかん：何、自分で言い出しといて。

新田：いや、あのう、はっきり24日何があるとは決まってないんですけど、一応開けときたいって言うか。

(アニメ 「あたしんち」)

(66) 「ごめん。せっかく誘ってくれたのに、悪いなあ。おれØ、さっきから腹の調子がおかしくて」

(アニメ 「あたしんち」)

例(64)(65)(66)も、(63)と同様に、親しい友達との会話である。「夏休みうちの別荘に来ない？」とか「クリスマスパーティー24日やる？」や「夏祭り行かない？」という友達の勧誘に対して、それぞれ、「生物部の活動で忙しい」、「24日はちょっと…」 「腹の調子がおかしくて」という《断り》の理由を伝えている場面である。これらは(63)と同様に、《断り》によって生じる対立を少しでも和らげるために、無助詞が用いられたと思われる。(67)(68)も同様な例である。

(67) (みんなで晩御飯を食べながら)

太郎：あっ、良かったら船乗る？ 一緒になあ？

次郎：うん。

空：うわ、嬉しいなあ～。

あっ、ちょっと。残念なんですけど。

とも：うん？

空：僕、明日の朝東京に帰らなきゃならなくなってしまって。

ちよって家のことで。

とも、なつ、しほ：へえ？

空：楽しかったです。ありがとうございました。

(ドラマ 「それでも恋する」)

(68) 圭介：このあと取材アポがあるんだけど、ちょっとためしに話し  
聞いてきてよ。

帆高：え？ 俺が？ 今から？

夏美：体験入店だね！

圭介：インターンだろう。

帆高：いや、ちょっと。俺、マジで無理ですから。

(アニメ 「天気の子」)

次の例(69)(70)は職場の上司と部下の会話である。(69)は部長が部下にお酒の《権誘》をしている場面であるが、「すみません」という謝罪の前置きと共に「この後ちょっと所

用があって」という《断り》の意図を伝えている場面である。(70)も「大変申し訳ありませんが」という謝罪の前置きと共に《断り》の意図を伝えている場面である。

(69) (飲み会で部長と)

部長：じゃ。

かしむら：すみません、部長。私〇、この後ちょっと所用があって。

部長：いいじゃないか。一杯ぐらい。

かしむら：でも、車なんですよ。

部長：車なんかおいて、タクシーで行け！さあ、飲め！

かしむら：そうですか。じゃ。

(ドラマ 「横山秀夫サスペンス」)

(70) 大変申し訳ありませんが、そのお話〇、お断りするわけにはいきませんか。

(ドラマ 「コールセンターの恋人」)

(71)は男の人が女の人にプロポーズをしている場面であるが、「結婚したくないんです」とか「家族というものが嫌いなんです」という《断り》の意図を伝えている場面である。(66)と同様に、《断り》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。(72)のように、直接的な断定を避けるために、「は」の代わりに「なら」が用いられる場合もある。以上のことから、《断り》の場面では、親疎関係と関係なく、直接的な断定を避けるために、「なら」とか無助詞「は」が用いられる場合があるということが分かった。

(71) (男の人がプロポーズしている場面)

いわい：旦那が亡くなって、もう七年も経つんでしょ。

もう十分でしょう。

(中略)

俺、今プロポーズしたんだよ。

てつこ：私に？プロポーズって？

私、結婚したくないんです。

いわい：ふむ。

てつこ：私、家族というものが嫌いなんです。

(ドラマ 「昨夜のカレー、明日のパン」)

(72) A：じゃ、付き合うよ。僕もコーヒー飲みたかったし。

B：私なら大丈夫ですから、ご心配なく。

(ドラマ 「愛なんていらねえよ、夏」)

## 5.2 《非難》

現代日本語の話し言葉では、断定が避けられ、曖昧な表現が好んで用いられる。沼

田(1986)は「あなたも人が悪いね」は「あなたは人が悪いね」のような直接的な表現と比べ、間接的な「やわらげ」の表現効果があると指摘している。本研究でも直接的な断定を避けることによって、話者の主観的な主張を和げたい時、無助詞「は」が用いられるという立場をとる。この点が、長谷川(1993)の「やわらげ(中立的叙述)」との違いでもある。

(73) 先生：今度は、この本を頭に乘せたまま落とさないように歩いてみましょう。

水島さん：立花さんお上手。

(アニメ 「あたしんち」)

実際の会話をみると、上例のようなプラス的な《評価》以外に、マイナス的な《評価》にも無助詞が用いられる場合がある。たとえば、例(74)は友達同士の会話であるが、例(74)の「お前、冷てえな。一方的にしかも電話できようならか」のように、友達を《非難》する場面でも無助詞「は」が用いられることがある。《非難》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたのではないかと思われる。

(74) 河本先輩：もしもし。

あや：あの、池内です。

あの、今まで色々ありがとうございました。

私、東高に受かった時、本当に嬉しかったんです。

先輩におめでとうって言ってもらえて、「またバスケやるだろ

う」って言ってもらえて、お揃いのバシューの紐も嬉しかったし。

でも、でも、私、部活やめることになると思うから。

だから、もう先輩とは。

河本先輩：分かった。早く元気になれよ。

あや：はい。さよなら。

あそ：お前、冷てえな。一方的にしかも電話でさようならか。

今頃河本先輩泣いてんじゃない？

あや：そうかもね。

あそ：嘘でも泣いてくれよ。

あや：嫌だ。

あそ：本当に冷たい。

あや：だって、あそくんが罰金払うの嫌だもん。

あそ：せこい。

(ドラマ 「1リットルの涙」)

(75) (駅前で友達を待っている)

ゆずひこ：遅っせーな、藤野。

川島：遅いな～もう。

ゆずひこ：この声は？！

ゆずひこ：(ゆずひこが公衆電話で藤野くん電話をかける) なんで川島が来てるんだよ！！

それになんでお前、まだ家にいるんだよ！！

藤野：俺、風邪引いちゃってさ。悪いけど、川島と山下のことに任せ

た。

ゆずひこ：おい？！任せたって！！

(アニメ「あたしんち」)

(75)は、一見、冷静な中立的な発言のように見えるが、「なんで」などが書いてあることから分かるように、相手に対する非難の感情が感じられる。(74)と同様に、相手を《非難》する場面であり、「遅っせーな、藤野」や、「なんでお前、まだ家にいるんだよ」のように、無助詞「は」が用いられていることが分かる。《非難》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。つまり、無助詞の使用により《非難》の語調を緩和する効果が生じるとと思われる。(76)、(77)、(78)も同様な例である。

(76) (お化け屋敷を行った後の飲み会で)

苺：あれ～高嶺先輩と弱木先輩、お化け屋敷で何かあったんですか？

(過去回想するシーン)

弱木・高嶺：(二人で手を繋いで)良かった～！やった～！やった～！

弱木：何も無いよ！

高嶺：え？

苺：え？

高嶺：(独り言) 何も無いって、弱木くん、あれだけのことをして

おいて、何も無いって言えるわけ？

弱木：本当、何も無いから。

(高嶺が強くテーブルを叩きながら立ち上がる)

チャラ田：お！

高嶺：何かあったでしょう！

チャラ田：びっくりした。

高嶺：ごめんなさい。

弱木：白状します。

高嶺：(独り言) ちょっと弱木くん、待って！

弱木：あの、実はお化け屋敷で。

高嶺：(独り言) 言うの？嘘！

弱木：めっちゃくちゃビビってちょっと漏らしそうでした。

高嶺：(独り言) それ？それじゃないでしょう？

チャラ田：ハハハ。弱木、だせえ。だから、お前は弱木なんだよ。

弱木：怖かったじゃないですか。

チャラ田：隊長、あのう、弱木に銀杏やってください。

(ドラマ 「高嶺のハナさん」)

(77) 社会者：日向翔陽、走り込んで決めた！

烏野1年生のコンビ、必殺ブロード炸裂！

チームのメンバ：よっしゃ！

木兎：いいぞ！日向！

赤葦：恐怖初見殺し。

日向：(独り言) 危なくあの顔怖い人に突っ込むとこだった！

影山：(独り言) 日向のフェイントに引っ掛かるどこだった！

観衆1：すごい～ 何あれ？やばない？

観衆2：やばいな？

観衆3：ブロードちゅで！男子ではあんま見ひんけどな。

観衆4：へえ～

侑：ブロックキングをぶっ千切る早さ。

でも、高さは一切殺さん。

かっこえーなあ～！生で見るとますますかっこえ～！

治：お前、試合になると精神年齢5才に下がんのなんなん？

侑：やかましいわ！

(アニメ 「ハイキュー!! TO THE TOP(2020)」)

(78) 治：でかい。

侑：でかい。5年生のアランくんらしいで。

かっこえーなあ！

治：ええな！

侑・治：横文字の名前！

アラン：そっちか！

侑：俺、改名しようかな。

治：勝手に名前変えたら、婆ちゃん悲しむんちゃう？

アラン：アホか。

治：サム！治のサム！

じゃ、侑はツムか！

治：いや、ツムは変やろう。

治：かっこよすぎる！

アラン：なんでやねん！！

イヌハタ：こんにちは。イヌハタです。今日はまた

(どンドン声が聞こえなくなる)

アラン：(独り言) 宮兄弟、その名前が有名になってくるより前から、  
俺は双子を知った。

治：セッターか、スパイカーを見たかったな。

アラン：(独り言) 失礼な双子やな。

治：ジバ来んかな、ジバ。

アラン：来るか、アホ。

治：つむ〇、アホやな。セッターが一番うまいやつがやるクールなポ  
ジションなんやで～。

侑：じゃ、治、セッターがええの？

治：いや、スパイカー打ちたい！

侑：じゃ、何で言うたんやん！

(アニメ「ハイキュー!! TO THE TOP(2020)」)

(79)(80)(81)は、いずれも、家族間の会話である。(79)は母親が娘と息子を《非難》している場面であり、(80)は、逆に娘が母親を非難している場面であるが、それぞれ無助詞「は」が用いられていることが分かる。《非難》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。(81)も同様な例である。

(79) (無くなったやきとりの犯人を探している)

母：可笑しいじゃないの。

みかん：何が？

母：ゆずが3本、みかんが4本しか食べてないんだから、残りが17本の  
はずでしょう？なのにどうして半分の12本になってるの？

しかも、レバーが1本も残ってない。

みかん：そんなこと言われたって。

ゆず：知らないよ。

母：あんたたち、嘘ついてるね。

みかん：ついてないって。

ゆず：ない、ない。

(アニメ 「あたしんち」)

(80) (ゴミ置き場で枯れた欄を見ながら)

母：みかん、見てごらん。欄だよ、欄。

みかん：お母さん、また拾って帰るつもり？

母：だって、これまだ生きてるよ。

みかん：恥ずかしいな、もう！

(アニメ 「あたしんち」)

(81) 母：どうしたの？

みかん：今夜のおかず、これだけなの？

母：そうよ、肉ジャガ。

ゆずひこ：これ、肉ジャガ？

みかん：ジャガイモと玉ねぎばっかに見えるんだけど。

ゆずひこ：これじゃ肉ジャガじゃなくて、ジャガジャガだよ！

(アニメ 「あたしんち」)

一方、次の例(82)のように、聞き手を非難する場合「奥さんと子供が病気だと言うのに、男のあなたは居間っから何をしてるのです」とか「働きもせず、酔って寝て、それでもあなたは父親ですか」という直接的な断定表現が用いられている場面もあるが、「男は不機嫌に黙り込んだ」という表現から分かるように、聞き手への配慮は感じられない。また、(83)のように、聞き手への配慮の要らない第三者を非難する場合も「今の若いやつらはドライだからな」という直接的な断定表現が用いられていることが分かる。これらのことから、無助詞には《非難》の負担を緩和する効力があるということが証明できる。

(82) 「奥さんと子供が病気だと言うのに、男のあなたは居間っから何をしてるのです」

男は不機嫌に黙り込んだ。

「働きもせず、酔って寝て、それでもあなたは父親ですか」

(松岡 2007)

(83) 「あんなにお祝金が集まるんだから、羨ましいと思ったのさ。今の若いやつらはドライだからな」

(「勝手にしゃべる女」)

(84)は、職場での公式的な会話である。たとえば、(84)は銀行の職員が相手の会計士を《非難》している場面であるが、無助詞「は」が用いられていることが分かる。《非難》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。

(84) あなた、どうしてそう執拗にチェックなさるんですか。

(ドラマ 「監査法人」)

以上のことから、《非難》の場面では、親疎関係とか上下関係と関係なく、直接的な断定を避けるために、「も」とか無助詞「は」が用いられる場合があるということが分かった。

### 5.3 《許可》

次は《許可》を求める例である。例えば、(85)の「いいですか？となり」のように、相手に《許可》を求める場面でも無助詞「は」が用いられることがある。《許可》要請の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。(86)からも同様なことが言えよう。

(85) A：こんばんは。

B：こんばんは。

A：いいですか？となり。

B：どうぞ。

(ドラマ 「結婚できない男」)

(86) 俺、ちょっとお隣さん誘ってみようかと思うんですけど、いいですか。

(ドラマ 「結婚できない男」)

また(87)の「ここ、よろしいですか？」のように、相手に《許可》を求める場面でも無助詞「は」が用いられることがある。《許可》要請の負担をすこしでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。

(87) (空いている席に座ろうとして)

「ここ (は?/ が\*)、よろしいですか。」

「ええ、どうぞ。」

(長谷川 (1993))

## 5.4 《注文》

次はレストランで注文をとったり、要請したりしている例である。例えば、(88)は、店員がお客様に注文を要請している場面であるが、「ご注文のほう、いただけますでしょうか」のように、「ほう」を用いることによって、丁寧さを表している事例である。(89)もあるカフェで店員が注文を取っている場面であるが、無助詞が使用されていることが分かる。無助詞の使用によって、お客様に配慮を示しているのではないかと思われる。(90)からも同様なことが言える。

(88) (あるカフェで店員が注文を取っている)

店員：ご注文、お決まりですか？

立花：私、アイスコーヒー。

戸山：私も。

水島：私もそれで。

店員：かしこまりました。

(アニメ 「あたしんち」)

(89) (数日後、あるレストランで)

店員：ご注文、何になさいますか？

立花：アイスコーヒー三つ、氷入れないでお願いしたいんだけど。

店員：氷抜きですね。かしこまりました。

(アニメ 「あたしんち」)

- (90) ちょっと、よろしいですか。あの、申し訳ありませんが、そろそろ  
ご注文のほう、いただけますでしょうか。

(アニメ 「あたしんち」)

## 5.5 《意見不一致》

次の例はいずれも、男女の会話である。それぞれ、(91)の「私、帰ろうかな」とか(92)の「もう、もう私、帰ります」のように、一見、日常の別れの挨拶のようにみえるが、実は、女の人が怒って先に帰ろうとする場面である。こうした場面でも無助詞が用いられたりする傾向がみられる。相手との《意見不一致》によって生じる対立を少しでも緩和しようとする対人配慮として無助詞が用いられたように思われるが、この点については、今後の課題としたい。(93)も同様な例である。

- (91) (AとBが口喧嘩している場面)

A：四捨五入して40の女は、車に例えると錆びついているんですか。

B：錆びついている方が腐るよりまだろう。

A：どうしてそんなひどいこと言うんですか。

私は錆びついても腐ってもないもん。

私、帰ろうかな。

(中略)

C：謝ったほうがいいじゃないですか。

(ドラマ 「結婚できない男」)

(92) (酒を飲みながら、弱木の悪口をしている苺に)

チャラ田：お前、いつもより可愛いな。

何かすっぴんって感じでき。

苺：もう、もう私、帰ります。

(ドラマ 「高嶺のハナさん」)

(93) (高嶺が映画を見ている途中、妄想をしてしまう)

高嶺：弱木くん、私のことどう思ってる？

何も言ってくれないんだね。私、帰るね。

弱木：好きです。高嶺さん、ずっと好きでした。

(ドラマ 「高嶺のハナさん」)

## 6. おわりに

無助詞とは話しことばに特有の、述語と名詞句の関係を表す助詞が現れない形を指す。本研究では無助詞「は」が話しことばにおいてどのような役割を果しているのか、またどのような時に現れるのかなどについて分析を試みた。分析の結果をまとめると、次のようになる。

1) 無助詞文は日常会話に現れるのが特徴であり、長谷川(1993)は、《依頼》、《勧め》、《申し出》の意図を表すため無助詞を使うと述べているが、実際、多くの例文を検討してみた結果、《非難》、《許可》、《断り》などにも無助詞「は」が用いられるということが分かった。

2) また、長谷川(1993)は、「取り出し」には「信号性」と「やわらげ」の機能があり、「やわらげ」は対比性や排他性を不問にして中立的に取り出す働きがあるとしている。一方、本研究ではポライトネス理論を援用して考察した結果、無助詞「は」には発話緩和の機能があるということが分かった。言い換えると、単に中立的に取り出す働きではなく、話し手の主張を弱める効果が無助詞「は」にあると言える。

3) 具体的には、例えば「一緒に帰らない？」と言う相手の勧めに対して、「私 〇、ちょっと急がなきゃいけないの」という《断り》の意図を伝える場面で無助詞「は」が用いられることがある。「は」が用いられると、対比や強調の意味になってしまうの

で、《断り》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。

4) また、実際の会話を見ると「お前、冷てえな。一方的にしかも電話できよならか」のように、相手を《非難》する場面でも無助詞「は」が用いられることがある。

《非難》の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。つまり、無助詞の使用により《非難》の語調をやわらげる効果が生じると言えよう。

5) そして、「いいですか？となり」のように、相手に《許可》を求める場面でも無助詞「は」が用いられることがある。《許可》要請の負担を少しでも緩和するために、無助詞が用いられたと思われる。

本研究の結果を先行研究と比較して示すと、[表2] のようになる。

表2 〈無助詞の機能〉

	発話状況	無助詞の機能
三上(1960)		信号性
久野(1973)		既知性
筒井(1984)		既知性
尾上(1987)	《質問》、《評価》	
甲斐(1992)		非丁寧
長谷川(1993)	《依頼》、《勧め》、《申し出》	やわらげ (中立的な取り出し)
甲斐(2000)		談話を円滑に運ぶ
本研究	《非難》、《許可》、《断り》	発話緩和

なお、ここでは、無助詞「は」だけみてきた。しかし、聞き手への配慮は人間のコミュニ

ケーション活動の中では欠かせないものであり、日常会話には、無助詞「が」や「を」なども頻出するが、今回は触れることができなかった。今後は、これらの使われ方についても調査したい。さらに、無助詞を使った配慮は、韓国語にもみられる現象であり、韓日で同じ傾向があるかどうかについても、今後の課題としたい。

## 【参考文献】

- 宇佐美まゆみ(1993)「談話レベルから見た“politeness”-“Politeness theory”の普遍理論確立のために」『現代日本語研究会』14：20-29.
- 宇佐美まゆみ(2006)「準自然場面における「誘い行動」の日韓比較-ディスコース・ポライトネス理論の観点から」『일본연구』28：47-72
- 尾上圭介(1987)「主語に「は」も「が」も使えない文について」『国語学』150.
- 大谷博美(1995)『「ハとガØ」, 日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版.
- 甲斐ますみ(1992)「話者が「は」「が」なし文を発するとき」『関西言語学会予稿集』：99-108.
- 甲斐ますみ(2000)「日本語の省略現象」大阪大学博士論文.
- 久野暲(1973)『日本文法研究』大修館書店.
- 久野暲(1978)『談話の文法』大修館書店.
- 黒崎佐仁子(2003)「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』：77-93.
- 加藤清方、佐久間勝彦、佐々木倫子、西原鈴子、仁田義雄、水谷修(2005)『新版日本語教育辞典』日本語教育学会.
- 武鹿悦子、はたちよしこ、佐々木たづ、後藤竜二、寺村輝夫、安藤美紀夫(2007)『日本の小学校2年生の国語教科書選』다락원.
- Tsutsui, M. (1983). *Ellipsis of ga*. Journal of Japanese Linguistics, 9(1-2), 199-244.
- 筒井通雄(1984)「『は』の省略」『月刊言語』13(5).
- 沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社.

- 中島文雄(1995)『日本語の構造-英語との対比-』岩波新書.
- 野田尚史(1995)『「ハとガ」, 日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版.
- 野田尚史(1997)『「は」と「が」』くろしお出版.
- 長谷川ユリ(1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80.
- 松下大三郎(1928、1930)『改撰標準日本文法』紀元社.
- 丸山直子(1996a)「助詞の脱落現象」『言語』
- 丸山直子(1996b)「話しことばにおける無助詞格成分」日本認知科学会 13回ワークショップ「日本語の助詞の有無をめぐって」ハンドアウト
- 松岡みゆき(2007)「疑問文における終助詞『よ』『ね』と複合終助詞『よね』の働きについて」『名古屋大学日本語・日本文化論集』15:1-23.
- 牧原功(2012)「日本語の配慮表現に関わる文法カテゴリー」『群馬大学国際教育・研究センター論集』11:1-14.
- 三上章(1960)『象は鼻が長い』くろしお出版.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2010)『コミュニケーションと配慮表現』明治書院.
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹(2018)『新版日本語語用論入門—コミュニケーション理論から見た日本語—』明治書院.
- Brown, P. & Levinson, S. C. (1987). *Politeness: Some Universals In Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, G. N. (1983). *Principles of Pragmatics*. London; New-York.

## 【用例出典】

- <ドラマ> 愛なんていらねえよ、夏. (2002). TBS.
- <ドラマ> 監査法人. (2008). NHK.
- <ドラマ> 極上. (2012). TBS.
- <ドラマ> コールセンターの恋人. (2009). ABC、テレビ朝日.
- <ドラマ> 結婚できない男. (2006). 富士TV.
- <ドラマ> 青春家族. (1989). NHK朝ドラ.
- <ドラマ> 高嶺のハナさん. (2018). BSテレ東.
- <ドラマ> 高嶺のハナさん2. (2022). BSテレ東.
- <ドラマ> それでも恋する. (2018). CBCテレビ.
- <ドラマ> 昨夜のカレー、明日のパン. (2014). NHKドラマ.
- <ドラマ> 横山秀夫サスペンス SP 2010 1部 「18番ホール」. (2010). TBS.
- <ドラマ> 1リットルの涙. (2005). 富士TV.
- <アニメ> あたしんち. (2002). TV朝日.
- <アニメ> 新あたしんち. (2015). TV朝日.
- <アニメ> 天気の子. (2019). 東方株式会社、コミックス・ウェブ・フィルム.
- <アニメ> ハイキュー!! TO THE TOP(2020). (2020). TBS、MBS.
- <アニメ> ワカコ酒. (2015). TOKYO MX、サンテレビ.
- <アニメ> 星を追う子ども. (2011). コミックス・ウェブ・フィルム、  
メディアファクトリー.

赤川次郎(2017) 『勝手にしゃべる女』 角川文庫.

# ABSTRACT

## 「は(wa)」 of Non-Postposition from the perspective of Politeness

Sa Se Rin

Department of Japanese Language and Literature  
Graduate School of Sungshin Women's University

There are some characteristics that are not found in the written language of Japanese. One of them is 'Non-Postposition' attached after a noun phrase. For example, in Japanese conversation, there are sentences such as 「(My friends' lunch boxes are fancy, but) my lunch box? (私のお弁当は?)」, and utterances that don't have such postposition such as 「Yukari's rice balls∅, that's awesome. (由香里のおにぎり∅、おしゃれたね。)」 and 「Lunch box∅, how was it? (お弁当∅、どうだった?)」 are often seen.

The subject or object being Non-Postposition is a common phenomenon in daily conversation and may be simply omitted, but in some cases, it cannot be explained unless it is Non-Postposition. In this study, the situation and conditions of 「は(wa)」 of Non-Postposition appear and what role it plays were considered from the perspective of Politeness.

Previous studies have pointed out that expressions such as "Request," "Recommendation," and "Evaluation" appear without postposition, but in actual Japanese conversations, not only positive evaluations, but also negative evaluations, "Criticism," "Rejection," and "Permission" or "Order" were used.

It is judged that the 「は(wa)」 of Non-Postposition was intentionally used to ease the burden of 'Criticism' or 'Advice' on the other person. In addition, in the scene of requesting "Permission" from the opponent or "Rejecting" the opponent's recommendation used Non-Postposition. This is to alleviate the burden of requesting "Permission" or "Rejection" even a little by avoiding the meaning of preparation or emphasis by 「は(wa)」.

Also, Previous studies have argued that the function of 「は(wa)」 of Non-Postposition has the function of 'Signaling' and 「やわらげ(yawarage)」, and that 「やわらげ(yawarage)」 has a neutral description regardless of contrast or exclusivity. However, in this study, it was found that the 「は(wa)」 of Non-Postposition has the function of 'Verbalness of Alleviation' as a result of reviewing based on the politeness theory.